
補陀楽の少年～夢の宮補遺集～

磯崎愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

補陀楽の少年〜夢の宮補遺集〜

【Nコード】

N4653P

【作者名】

磯崎愛

【あらすじ】

17世紀チベット。23歳の若きダライ・ラマ法王を慕う少年テンジンの物語。（全9話）

自サイト「唐草銀河」からの作者による転載です。

はじまる——少年は口角の切れた唇からほそい息をついだ。この一瞬のために、朝の勤行をさぼって抜け出してきたのだ。

うす闇のなか目をこすってそちらを仰ぎ見た瞬間、きらりと白銀の戴きが光り、目を焼くような輝きが青闇を切り裂いた。つづいて尾根をなめるように、太陽の狂おしい光がその形を照らした。どうにか瞬きをこらえると、それまでのよわい反射と違う、目を細めるほどの光がつぎつぎに弾かれる。それは、宮殿の屋根を飾る金の法瓶の照り返しだ。彼が肩でひと呼吸したと同時に光り満ちる紺碧の空に忽然と、紅白の宮殿があらわれた——ラサ市街を見守るように建つポタラ宮。観世音菩薩の化身ダライ・ラマ法王の居城であり、菩薩の住む補陀楽浄土をあらわす宮殿だ。

光の饗宴が終わり、あたりがすっかり白い朝の空気にかわると、テンジンは小さなあくびをした。僧にはふさわしくない振る舞いだが、見るものはいない。彼はせなかの力を抜いて、両手を後ろについた。ふわり、と丈高い草木が肉のうすい背をかかえこむ。

（ぼくだけが知る、いちばん美しいポタラ宮）

頬をかすめた菜の花をそつといじる。指先に、あおい草が匂う。標高の高いこの地では、初夏になってようやく菜の花が咲く。菜種油をとる花畑で偶然、この位置で見る宮殿がもつとも美しいことを知った。それからもう数ヶ月たつ。もったいなくて、宝物のように秘密にした、誰にも知られないところ。

（まだ、戻らなくてもいいかな）

そう思ったとたん、眠くなる。ぼんやりしているとまどろみそうだ。花畑の中、うとうとしはじめた頭のうえに声がかかる。

「テンジン、テンジン。起きなさい」

びっくりと肩を震わして顔をあげると、息をのむほどに端正な相貌がまぢかにあった。

「猊下」

慌ててしゃんとするテンジンを見て、青年は微笑をうかべた。

「もう私は『猊下』ではない。還俗したのだから、今はただのツァンヤン・ギャムツォだ」

「ですが」

「いくら言っても聞かないのだから」

そう言って笑った法王は二十二歳。この、若すぎるようなダライ・ラマ法王が自らタシルンポ寺に赴いてパンチェン・ラマに戒を返してからすでに三年の月日がたつ。

「あの、なにか御用があつたのでは」

「私の大の苦手な大摂政殿が私を探しているらしいので、どこか身を隠すところを探しているのだよ」

「サンギィエー殿下が」

テンジンは、そつとあたりを窺うようにして野原を見渡した。

偉大なダライ・ラマ五世に仕え、五世とともにこのチベットに絢爛たる仏教王国を築いたサンギィエー・ギャムツォ大摂政。彼は五世の絶大な権力を象徴し、その霊廟でもあるポタラ宮を建造した。その偉業は過去に例のないことだ。

六世の還俗の責任を負つてその地位を降りたこの今も、サンギィエーは外交のすべてをあずかつている。雪山^{せつせん}の頂きにあるチベット王国を、清国、そしてモンゴルの汗たちから守り得ているのは、彼の外交力にあつた。

「あ、ほら、言っている間に」

河畔を黄金にそめあげて風に揺れる菜の花のなかを、若者のような足取りで、臙脂色の法衣をまとつたサンギィエーがすすんでくるのが見えた。権勢を極めた大摂政の昔を知るものなら想像もできないくらい質素な装束だ。サンギィエーは五十歳という年齢に達しているはずだが未だ衰えを知らず、その声がまたよく通る。

「またこのようなところで遊んでいらしたのですか」

青年は、眩しいのか瞳をほそめただけだ。

「それに、街に出ては恋愛詩を詠うのはもうお止めください」

大摂政の厳めしい声にも、弓なりの眉をしかめただけで何もこたえなかった。

「猊下、街の女の色香に迷い溺れるなどあさましいことです。法王である貴方様がそのような有様では、五世の築いたこの浄土までが汚れてしまいます」

「大摂政殿下、猊下にむかつてそのような」

あまりの言葉に、テンジンが大摂政を見上げ恐れもせずに返した。大摂政はまだ幼さの残るようなテンジンを見おろし、淡い色の瞳で名をたずねた。彼がこたえようと、大摂政の瞳に閃きがはしる。

「清国の言葉も話せる優れた侍童だと聞いていたが、そなた、六世のそばで何をしている」

まるで詰問するかのような口調に六世がわって入った。

「テンジンは関係がありません。諫めるべきは私でしょう。大摂政殿、なにか火急の御用事でも」

「貴方様を連れ戻しにまいったのです。今すぐ、白宮にお戻りください」

「それは、御命令ですか」

六世はうなだれ、しずかな声でそうきいた。

それ以上言葉をつぐこともできず、大摂政は立ち尽くしたがそれも一瞬のことだった。次には色の失せたうすい唇をかたく結び、禽獣のような眼差しで六世を見据える。

テンジンは、ただ六世の本意を探るようにその整った白い面を見つめるだけだった。少年の視線に気づいてか、六世は顔を上げた。

「テンジン、おまえはこんなところで勤行を怠っていてはいけない。学舎で待つておいで」

そう言って少年の肩をたたき、踵を返した。歩み出した六世を追うように足をすすめた大摂政は突然ふり返り、いくらか灰色がかった瞳を彼に向けた。

その意味をはかりかねテンジンが首をかしげると、憐れむような微笑が一瞬うかんで、すぐに消えた。

テンジンの目には、黄金の葉の花をかきわけてすすむ彼らの法衣がそこだけ、しみのように暗く沈んで見えていた。

テンジンはラサ市街の裕福な商家に生まれた。彼の父は清国から美しい絹織物を運び、ポタラ宮に納めていた。母は清国のひとで、いつも綺麗に髪を結びこざっぱりした服を着て、天女のようにも思えたものだ。

ところが彼が十歳になった年、清国から帰る途中に父親が盗賊に襲われた。積み荷をすべて奪われたうえ父は生きて戻ってこなかった。また、一緒にいた兄のツァンヤンはその時の怪我がもとで亡くなった。母も兄を看取ると、ふたりの後を追うように死んでしまった。

彼は叔父の家に引き取られた。叔父の妻ボルデは赤い頬をした丸顔の、気取りのないあたかなひとだった。叔父との間の子と隔てなく接してくれられるほど、テンジンはどこか胸の奥が痛いような気持ちにさせられた。

叔父の二人の息子と娘は彼より幼く、字の読み書きができるテンジンを無邪気にえらいと信じていた。野良仕事に出かけると、いとこたちは実の父親より彼のまねをした。娘のアランは桃のような頬をして、いつでも彼の後ろについて歩き回った。アランにまわりつかれると、彼女を可愛いと思いつつ同時にうとましく感じた。

むしように独りになりたかった。

二年ほどたったある夕、納屋の外に出るところで、叔父がとつぜん言った。

「寺に入ってみるか」

はじめ、テンジンは納屋の戸を秋風がつよく打つ音のせいで名前を呼ばれたことも気づかなかった。叔父は父に似た、少しだけつりあがった目じりをさげてくりかえした。笑ったのだと気づくのに、ひと呼吸ほどかかった。なぜ、微笑まれたのかもわからなかった。

「今日、導師さまがお見えになってな。おまえを寺に入れてみないかと言われたのだ」

自分はなにか、この叔父の望まないことをしただろうか。とテンジンは考えた。しかし、それならばこんなふうに微笑んだりしないだろう。叔父の瞳はおだやかなままだ。

「テンジン、おまえは私の子になって、ここで荒れた土地を耕すことを嫌がったことは一度もない。私の子供たちにも優しくしてくれる。けれど、おまえの心のなかはいつでも、雪山の頂きに吹くような、轟々と冷たい風が吹いている」

目の前で、踏み固めるように立つ叔父に何故それがわかるのだろうと思った。

「おまえは、なぜ自分がひとりでこの世にいるのか、両親や兄がどこに行つたのか、なぜおまえを置いて逝つたのか、そうしたことがいつも気になっているのだろう」

彼の喉に熱い塊がおしよせてきた。なんだろうと思う間に、目と鼻に濡れたものがあふれていた。叔父は甥の涙にまるで気づいていないような素振りで続けた。

「私にもそれはわからない。だが、寺に入れば徳の高い方々がおまえの知りたいことを教えてくれるかもしれない。修行は厳しいが、すでに読み書きができる分、同じ子供たちよりは助けになるだろう」
うなずいたテンジンは顔を乱暴に肘でぬぐった。叔父はその肩を何度も何度も撫でさすり、そつと遠慮がちに抱きしめてくれた。

それを、昨日のことのように思い出す。

叔父の言うとおり読み書きのできたテンジンは行儀見習いができて容姿が整っていることも手伝って、法王の侍童の役目を与えられた。若く美しい法王は、名前をツァンヤンといった。ちょうど、最後の旅に出る前の兄と同年だった。

泣き叫ぶ氷の風が夏の日のそよ風が変わつたのに気づいたのはそのしばらく後、法王に名前を呼ばれた時のことだ。

十七世紀において、ポタラ宮は東洋一の美を結集した場所だった。壁面は色鮮やかな絵巻物として歴史を物語り、床には天上の花を散らしたかのような絨緞がひかれていた。

モンゴルの財政的寄与を受け、五十年もの月日をかけて天空の地に巨大な宮殿をつくりあげた。チベットだけでなく、ネパール、カシミールなどからも職人が訪れて法王の住処を豪華絢爛に彩ったのだ。室内の調度のすべてが並のものではない。玉でできた器や杯。黄金の眩しい仏像の数々。瑠璃や珊瑚、トルコ石、瑪瑙、金剛石、紅珠……ありとあらゆる貴石をふんだんに用いた祭器。チベット王国とダライ・ラマ法王の偉大さを讃えるがごとく、すみずみまで凝らされた細工の美しさは見る者の心を奪う。絢爛たる装飾のすべては、この宮殿をその名に違わぬ壮麗なものとしていた。

その紅宮が歴代のダライ・ラマの靈廟であるとすれば、白宮は現ダライ・ラマが政治を執り行うところだ。

そして、白宮の一室で先に口をひらいたのは、六世のほうだ。壁にかかるタンカ 仏画に目をうつしながら、彼は白い手に静謐な光をはなつ玉の杯をもてあそびながら告げた。

「大摂政殿、貴方の夢にすべてを犠牲にするのはもう、やめていただけませんか」

大摂政によつて秘密裏に育てられたこの若いラマは破戒僧そのもののよう振舞っていた。その立場もかえりみず女と戯れ、恋愛詩を口ずさみ、ついには自らダライ・ラマとしての戒めを返し還俗してしまつたのだ。

ところがこの今も、民衆は彼を法王として慕い、崇めていた。女色ゆがを「無上瑜伽タントラ」の実践としてとらえたのだ。男女交合像に顕される瑜伽行者を体现する法だと人々は信じたのだ。

大摂政は、六世の見つめる絹本に視線を向けた。そこにはこの宮

殿の本尊である観世音菩薩の艶麗な姿がうつしだされていた。このチベットの空のごとく青い画布に、純白の清らかな肢体が光るようだ。虹色の光輪につつまれ、紅、碧、翠の羅をまとい、いくつもの宝玉を身につけている。心なしか、その面差しは六世に似ているように感じられた。

「私の夢に貴方様を縛っているつもりはございません。すべては先代の御遺志にて」

「私が真実、先代の生まれ変わりなら貴方は私をこのように諫めたりはしまい。あの偉大なひとはいくつかの誤りを犯しながらも、いつも正しい道を選ぶ方だった」

「と、私は思っておりますが」

大摂政はそうこたえ、その誤りを正すためにもと続けようとしたが、六世はそれを許さなかった。

「第二のブツダと謳われたアティーシャにも劣らぬ才知ある貴方だ。ここ、チベットの統一政権を築くなどいかにたやすかったことだろう。五世の、あの幾多の謬りさえなければ」

チベットの歴史は古い。彼らチベット人の祖となる猿に生命をあたえたのも観世音菩薩であると信じられていた。この地では、人は菩薩の慈悲のもと生まれたのだ。

この天空の神秘なる仏教王国は幾多の不思議なめぐり合わせの上に成り立ってきた。七世紀にソンツェン・ガムポ王が仏教への信仰にあつい唐の文成公主を妃に迎え、その影響を受けた吐蕃王朝を生んだ。それ以降、幾度かの分裂の危機を切り抜け、他国の侵攻を退けながら独立を保ってきた。しかし十三世紀より事情が変わった。この王国は、元、明、清とそれぞれの王朝に服従を強いられた。

それを厭うた五世はチベットの聖俗両方の統一者として、紅い山の上にあつた観音菩薩像をまつり、ダライ・ラマの宮殿、ポタラ宮を建造した。チベットの統一支配者は菩薩の化身ダライ・ラマであるという信仰を、真実のものとして知らしめたのである。

そうした偉業を達成したのが五世であり、その全幅の信頼を寄せられていたのがこの大摂政、五世とは親子以上に年が離れていた年若いサンギエー・ギャムツォだ。彼が、ようやく口にした。

「統一チベットの崩壊の予兆、その発端の原因はすべて、五世の決断の中に内在していたことは事実です。モンゴルにおいてあれほどの勢力を誇った五世は、呉三桂の乱の際、彼を庇護したことで清朝の不興をかい、拳句、疎まれはじめました。五世を支えたグシ汗の跡をガルダンに継がせたことも清朝の不信をうみ、ラプサン汗の台頭を許しました。また、パンチェン・ラマをタシルンポ寺においたことは反ダライ・ラマ派の勢力を助長するだけのものとなっております。たしかに」

彼はそこで言葉をとめた。重苦しい吐息をもらすかと思われたが、そのまま。

「ラプサン汗はパンチェン・ラマと手を組み、そして清朝が、この

神の地に襲い来ることでしょう」

淡々と、大摂政は必ず起こるだろうチベットの未来をも語った。

サンギエーは政治家であり仏教学者であり、歴史、医学、暦学、文学においてもその天才をほしいままにしていた。一六七九年、二十七歳という若さで摂政となった彼は五世の死後、そのすべてを委ねられた。五世の死を十五年ちかくも隠蔽し、彼は政権を維持しつとめた。ガルダンを支えたのも彼の努力であつた。

しかしながらこの今、ガルダンは清朝に滅ぼされ、モンゴルは清朝にくみするラプサン汗の力が優勢だ。

おそらく、大摂政の言葉は予言となる。

そう思いながら、六世は睫を伏せた。

ひたすらに重い沈黙が一室を満たしている。あでやかな色彩に埋もれる豪華な部屋のしつらえがうわついた空虚に変わるのを、黙つて、ふたりは感じていた。

テンジンは参礼者にまじって五体投地をくりかえしている。両腕を頭上に掲げ、身を投げだし、立ち上がり、祈り、そしてまた身を投げ出す。進むのは、投げ出した身体の分だけである。

巡礼の徒は衣服をぼろぼろにし、その膝と肘を擦り傷でいっぱいにしてこの神の地、ラサへとやってくるのだ。そうしてここに着いても、五体投地をくりかえず。

敬虔な彼らは何千里もの道をそうして進んできたのだ。大地にぬかずき、額に堅い土を感じながら、ひたすらに菩薩へと祈りを捧げながら、立ち上がる一瞬に銀の山を頂いた蒼弓を仰ぎ、神の地を目指して……

荒涼たる野を越えてきたものにとつては、ここ、きらびやかで美しいポタラ宮はまさしく菩薩の住まう浄土としてうつたである。年齢や性別に変わりなく彼らは緊張した面持ちのまま、ここで熱狂的な歓喜とともに祈りを捧げていた。

テンジンはその姿を横に見てつと立ち上がり、そこを離れた。

（ここはどれほどに美しかろうと、それでもほんとうの補陀楽浄土ではないのだ）

唐突に、かつて六世の語った言葉を思い出す。

夢の跡。

偉大な五世の残したすべてが潰える、と。

その夢の跡だけが残るのだと。

顔をあげると、同じ学舎の僧がバター茶を運ぶのを見かけた。ごく上等な器が二つ。明らかに巡礼者に配られるものとは違う。

テンジンは、呼吸をととのえて声をかける。

「それはわたしが運びます。いつまでも来ないものだから、サンギイエー殿下が迎えにやらせたのです」

その僧は大摂政の勘気をこうむるか、内心おそれていたらしい。

テンジンの申し出に快くその役を譲った。盆を受けとり少年は白宮
へとむかうことにした。

そうしてふと見上げた空は雲一つなく、彼の意識さえ奪うかのよ
うに青かった。

「大摂政殿」

室内の奥から響いたその声は、テンジンの聞き慣れたツァンヤン・ギヤムツォのものではなかった。微笑をうかべて彼を見つめる青年のものとは思えないくらい厳しい声に、少年は知らず足音をしのばせていた。そのまま壁に背をついて足を止める。立ち聞くような姿勢に躊躇したが、早鐘をうつ鼓動と足の震えがそれ以上先へと彼を進ませはしないのだ。

「私が五世の転生者ではないように、貴方も徳高い高僧ではないのです」

そう、聞こえた。

チベット仏教の特異性、その代表はやはり転生活仏制度であろう。活仏が亡くなるとその死から四十九日以内に受胎されて生まれた幼童を探して教育し、跡を継がせたのだ。幼童を選びだすには様々な奇瑞はもちろん、護法神の導きや不可思議な儀式が必要とされた。

それが、楞伽經りやうがに説かれる「一闍提いつせんだいの菩薩」を具現化する相続形態だ。すべての衆生が救われるまで、仏と同じ位にありながら現世にうつし身をおき転生し続ける理想の菩薩の姿。

（猊下は、ご自分の正当性を否定しておいでだ）

バター茶の表面が小波だっている。

「先代が亡くなる際、その側にいたのはまだ若い貴方だけだった。その遺言を聞いたのも、貴方だけ。ダライ・ラマの転生活仏制は貴方によってさらに堅固なものとなって確立されるだろう。この先も永遠に」

六世は彼自身の正統性に疑いをもっているのかとテンジンは思ったが、それは誤りだった。

ダライ・ラマ制度そのものへの批判である。

大摂政のこたえはない。不気味な沈黙が続いていた。それを破り、

再び、

「理論整然と活仏制を唱えながら、そのどこかに、貴方の、救われ難く懊悩する業が見えるのです」

（それはでも、ソントエン・ガムボ王も菩薩の生まれ変わりであったそうだし、このチベットの神権制は活仏制があつてこそ守られるのではないのかしら）

テンジンの疑問は深くなる。が、次の瞬間、低くもれでる嗚咽の声にたえきれず、駆け込むように奥殿へと足を踏み入れた。

冷めきつたバター茶が床に飛び散った。立ちのぼるそのきつい臭気のほか、テンジンが目にしたのは六世の足下に跪き涙を流す大摂政の姿だった。目を疑うような衝撃に、また自分の粗相の無様さにしゃがみこむと、指をついた先に宝石で飾られた腕の冷たさが痛かった。

「テンジン、ほら、立ちなさい」

そう、なだめるような声がおりにきた。

「泣かなくてもいいのです。零したお茶は誰かに掃除させましょう」
彼は自分が泣いていることさえ知らなかった。六世の白い手がその腕を取って立ち上がらせた。先ほど触れた碗よりも、その手のほうが冷たかった。

「次からは、立ち聞きは許しませんよ。わかりますね」

テンジンは膝を震わせたまま首肯した。顔を見あげるのが恐ろしかった。涙はすでに、止まっていた。

「わかったならばいいのです。テンジン、行きましょう」

いつものやわらかな声でそう言つて、少年の肩を抱いた。そうして立ち去ろうとした六世の背に、床に手をついたままの大摂政サンギエー・ギャムツォの叫び声が追いつがる。

「猊下、貴方様は自ら定まるその業をどこまでも否定するおつもりかっ」

テンジンの肩を抱き支えながら歩む六世が、ゆっくりと振り返つた。

「私が本当に真実ダライ・ラマであれば、私には繋がるべき業もないはずです。すべての涅槃を願いながら夢見るだけの仏であるよりは、あさましい業に縛られながらこの現し世で人らしく生きる道を選びたい」

「されど、民は菩薩を望んでおります」

「囚われているのは貴方です、大摂政殿。五世の目指したものは理想の仏教国の建設ではなく、弱きものを一人でも多く救済しようとする慈悲の、」

「そのための、ダライ・ラマではありませんかっ」

「五世は、もうこの世にはいないのです。貴方の見た夢はただの夢です。貴方はただひとえに五世の偉業を継いでいくただけに……そのためのだけのダライ・ラマを設けたのです。それがために後代の者にどれほどの苦痛を味合わせるか、貴方は解っておいでなのか。どれほどの時を過ごそうと貴方のもとに五世は還つてはこないのです。貴方がいくら永遠を欲しようとも、それは叶わぬ夢だと」

大摂政がそこに、力尽きたように崩れ落ちた。その背が、法衣から突き出た細い腕が、小刻みに震えていた。

「お止めください。お願いです。そのようにお苦しみ合わずとも、なにか、なにか別にとるべき道がありますでしょうに」

六世は、テンジンの瞳をじろくに見つめる。ひたむきな黒い瞳だった。少年は老いた大摂政を庇うようにその隣に座した。

「猊下、もう、お止め、ください……」

そのとぎれとぎれの涙声に六世は身を翻したらしい。たつぷりとした厚手の法衣の揺らめきとその風を感じた。去つていく足音の遠ざかるせわしさに、テンジンはひやりと手足が冷えた。

「テンジン」

大摂政の声が名を呼んだ。

膝をついたまま、後の世にまで名を残す大摂政が乱れた法衣をととのえることもなく言った。

「行きなさい。そなたは法王猊下の侍童だ。いつなりと、おそばを

離れずに」

うなずいたテンジンの頬を、熱い涙がつたって落ちた。

見上げる空は、それでも青い。

無量の太陽の輝きに雪山の頂はその光を弾いてきらめき、ポタラ宮の金屋根をさらに輝かしいものにす。黄金と宝玉、目も眩むほどの極彩色にいろどられたポタラ宮は空に浮かぶ。

「やはり、ここにおいでだ」

テンジンの屈託のない、それでも少しだけ遠慮がちの声が風に運ばれた。

「猊下、隠れんぼは苦手ですね」

黄色い花畑では、六世の法衣は目立ちすぎる。風に揺られた黄緑色の茎と葉は、独特の草の匂いをはなっていた。

「ここへ。頭の上を風がすぎていくよ」

言われるままに、テンジンはとなりに腰をおろした。さわさわと、金色の花弁を揺らしながら風が過ぎていく。

草の香に、いとこ達と転げ回って遊んだ懐かしい記憶にふれた。彼らの顔をしばらくぶりに思い出す。

「テンジンはなぜ僧になったのだ」

彼は、今でもそれについて上手にこたえられなかった。

なぜ人は生まれ、生き、死ぬのか。

なぜ、自分は自分なのか。

そうしたすべてのことを知りたかった。

けれど、今になってみると、テンジンがあのこと抱えていた苛立ちや悲しみ、焦燥のすべて、叔父のいう轟々と吹く冷たい風の正体は、そんなことではなかったような気もする。

今も謎はそのままだが、自分の胸にあの吹きすさぶ冷たい風の音は聞こえない。

それはきつと、目の前の尊い存在に出会ったせいだろう。
否。

（叔父もボルデ叔母さんも、みんな、優しくった。尊い心根の持ち主だった。でも、あの時の自分にはその慈しみを容れるだけの気持ちになかったんだ。自分の、心の痛みにはかり囚われていた）

テンジンは、ゆっくりと口をひらいた。

「家族が死んで、わたしの心なかに大きな穴が開いたようになって、いつも冷たい風が吹いておりました。叔父が、仏の道を学び尊い菩薩の慈悲の御心におすがりすることで、わたしのなかで何かかわるのではないかと勧めてくれたのです」

青年は黙ってうなずき、それからいったん口を結んでから思い出すようにしてたずねた。

「それで今は」

「猊下にお会いして、いつしか冷たい風は止み、今日のような心地よい夏風が吹くようになりました。けれど、痛みは消えません。それでも教えを学ぶことで、何かは少しずつ変わってはおりますが……」

耳の横をいきすぎる風の音に耳を澄ませていたテンジンに、六世が言った。なんでもないような声だった。

「ラプサン汗が戦の用意をしはじめたらしい。もうすぐここも、戦場になる」

テンジンはもう、驚かなかった。

汗がパンチェン・ラマと共謀して清朝とともにこの神の地を奪いにくる。それを避けるために大摂政は様々な外交努力を行い、六世はパンチェン・ラマに戒をかえすことで一つところにある権力を放棄し、反ダライ・ラマ勢力の不満を抑えようとした。

「大摂政も私も、お互いこの数年間、無為に過ごしたわけではないのに、それでも来るべきことはやって来る。この聖なる都が、清朝と汗の猛威に晒されて崩壊するのだ」

先代の五世は国の存続を危ぶみその将来を憂えながらも、自分を頼ってやってきたものを見殺しにはできなかった。そして、さらなる仏教の信仰のためにパンチェン・ラマの後継者を認めたのだ。国

主たるよりは、真に菩薩の化身であつたのだ。国をつくり、王になることで救われるものの多くなることを願ひ法王となった。

「祈りというのは恋に、似ている」

後の世までうたいつがれる甘美な恋愛詩の作者はそう言った。

「恋、ですか。慈愛、慈悲ではなく」

「『悲』の原意は呻きであって、苦しみに嘆き悲しみに共感することとをさすのだよ。それが菩薩の役割」

六世はそこで、顔をあげて続けた。

「けれど、祈りは、まるで絶対に手に入らぬものを恋い慕う絶望のなかのかすかな希望に似ている。ありもしない救いの時を待ち、一心不乱に身を投げ出す信者の姿には、ただひとえに『悲』を恋うるものの哀しみを感ずる」

かもしれない、とテンジンは思った。

「その祈りを糧に、菩薩は永遠の時を生きるだろう。そうしていつの世にも、菩薩の化身は在り続けねばならないのかもしれない。偉大な五世の威光を残さねばならないと考えた大摂政のためではなく、いつの世にも略奪され虐げられる弱きものたちのために」

瞳を伏せた六世の面は、菩薩を思わせる、あの微笑をたたえていた。

テンジンはふと、思ったことを口にした。

「サンギエー殿下も菩薩の大いなる慈悲の心によって救われるのを待つ衆生の一人なのです。猊下は、自ら涅槃という安寧を放棄し、輪廻の時の輪に繋がれる悲しい生き物と同じ位において、この世のすべてが涅槃を迎えるまでここにとどまられるのです。それがどんなに遠い日のことだとしても、いつか必ず来るそのときまで」

いつもと変わらぬ少年の声に、六世がたずねた。

「いつかそういう日がくると」

「ええ。祈りが恋だというのなら、あの麗しく優しい観世音菩薩がそれに応えないでいるわけがありませんもの」

テンジンは澄んだ瞳のまま、はるか彼方のポタラ宮を仰いでそう返した。

花びらが金色の雲となり、遠くの宮殿をその雲海のなかに漂わせていた。白銀の尾根を従え、晴れわたる青い空に浮かぶ宮殿は、まさしく補陀楽浄土であった。

「猊下はあそこにいるべきを、ここにおりて、街の者やわたしのよ
うな衆生のために詩をうたつておいでです。祈る心を失うことさえ
なければ、いつか、皆の心から苦しみは去りましょう」

テンジンのまだ幼い声を聞きながら、頬を撫でる風を感じて六世
は目を閉じた。

どうやら、テンジンは勤行に戻るつもりらしい。立ち上がり、元氣
よく法衣の汚れをはたき落としている。

「わたしは言い付けを守って行きますので」

「ああ、後から行くので心配しないで」

「はい」

振り返らずに、走る。

黄金をかきわけて進む紅の法衣は目に飛び込んでくるようだ。そ
の鮮やかな色彩に、なによりも華麗な天空を仰ぐ。

（いつか、菩薩の白き腕は、それを信じて待つ者たちをあの麗しい
浄土へ誘うことがあるのだろうか）

見上げる空に問いかけると、なにかも包みこみとかしていくよ
うな大気にその疑問さえ奪われていた。湿気もなく塵もない、なに
もかもを克明にするとこまでも澄んだ大気は、身体を突き通すかの
ような光を抱いてここにある。

瞳をうつすと、そこにまだ、テンジンの背が鮮やかに見える。青
い空の下、黄金の葉の花のなか大地を踏みしめて走る少年の姿は愛
しかった。風をはらむ法衣を蹴りあげる素足が健やかだ。

（もしかすると、この大地が、浄土であるのかもしれない。私を信
じて慕ってくれる人々のいる、この大地こそが補陀楽浄土）

そう思い、彼は補陀楽を走る少年の姿をいつまでも見守っていた。

後日、大摂政は自身の予言どおり、この地に襲いきたラプサン汗に殺害された。

六世は清軍に拉致され護送される途中、青海にて没する。民衆は六世を取り戻そうと果敢に清軍に挑み、六世は無辜の民が殺されるのに耐えきれず自ら命を絶ったのだと噂された。

清の言葉を話せた少年テンジンは最後まで六世のそばにいただろうか——そこが、補陀楽浄土だと信じて。

9（後書き）

了（2005年）

最後までお付き合いくださいましてありがとうございます。
下記サイト『唐草銀河』のほうにも歴史短編などあります。
お越しくだされば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4653p/>

補陀楽の少年～夢の宮補遺集～

2011年4月27日20時55分発行